

## 留学報告書

法文学部 人文社会学科 グローバル・スタディーズコース履修  
4回 松本知紗

# 交換留学報告書

留学国：アメリカ合衆国、イリノイ州

大学名：College of Lake County(カレッジオブレイクカウンティ)

留学期間：2023年1月～5月

## 〇はじめに

本報告書では、2023年1月～5月にかけてのイリノイ州 College of Lake County(以下 CLC)での留学を通じて得た学びや体験に関してご報告いたします。つきましては、今回、海外派遣奨学金というご支援をいただきまして、有意義な留学生活を送ることができましたこと、御礼申し上げます。

## 1. 留学に至った経緯

将来はグローバルな視点を持ち、世界と関り、自国の発信をしたいという目標があった。これを実現するにあたり、「語学力」と「グローバルな思考力」を現地に身を置いて、身に着けることが必須だと、考えたことがきっかけだ。

愛媛大学の先生方や職員の方に相談させていただく中で、自身の語学力との兼ね合いや、留学生への手厚いサポートがあることから CLC への留学を決意した。

## 2. 現地の大学や生活について

### (1)大学の授業

語学の授業である ELI(English Language Institute)の読み書きと、話す聞くクラスの2つと、音楽の歴史(Music Appreciation)の3クラスを履修した。

#### ●ELI

語学のクラスは、留学前に受験した英語力テストの点数でレベル別に決まる。私のクラスは出身国が全員異なる12名で構成され、アカデミックな英語を学ぶ実践的なクラスだった。読み書きのクラスは Academic class と呼ばれ、ここでは学術的論文やレポートを読み、自身でレポートを書くという授業だっ

た。予習であらかじめ指定の論文を読み、授業内では構成や文法を論理的に学び、課題にて実際に学んだ文法や単語を使用し、レポートを書いた。

話す聞くクラスは Oral skills と言い、毎回異なるテーマに沿ったプレゼンを用意し、時間制限の中でスピーチするという口語的英語を学ぶ授業だった

英語で書くことは試験などで経験があったが、大学のレポートとして規則のある構成に沿うことは初めてで、調べたことの順序立て方や、接続詞の使い方は慣れず苦戦した。しかし、授業内で教授に口頭で質問し、修正してもらう時間が必ず設けられ、課題を解決する速さからモチベーションになった。

英語でのプレゼンは、用意が肝心であるとともに、アドリブ力も要した。テーマは自国の文化や、統計を用いたもの、国際問題など様々だ。とても学びになったのはクラスメイトからのフィードバックである。毎回コメントシートに点数や気づきを書くのだが、バックグラウンドが異なるからこそその考え方やアドバイスをもらい、多様な考え方を知り、視野が広がったと感じる。

### ●音楽の歴史

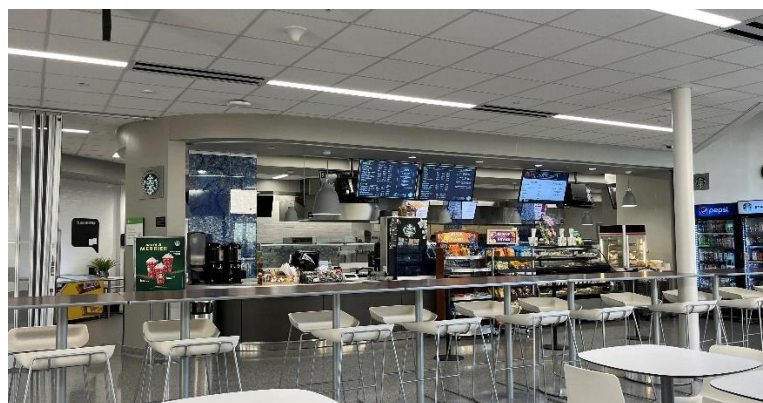
音楽の構成や、作曲の背景を通じ、音楽がもたらす創造的思考を学ぶ専門的授業で、初めは聞いて理解することで精一杯であった。実際に中世を中心に、音楽や時には絵画も用いて鑑賞し、構成を学んだ。このようなジャンルの講義は受講したことがないため、興味が沸き、受講した。授業終了後には、教授に質問したり、雑談をしたりと、積極的なコミュニケーションを通じ、わからない部分を解決し、学びを深めることができた。

### (2)大学内での活動

出身国 20 か国以上という多様な学生が集まっていることも CLC の魅力だ。留学生が集うことのできるオフィスが設置されており、1日を通し様々な学生が出入りし、交流できた。そこでは毎週イベントやゲームが行われ、コミュニケーション力を培うことのできるアウトプットの場であった。自国の伝統料理を持ち寄るものや、アメリカの行事であるイースターにちなんだイベントなどがあり、自国の文化をお互いで楽しみながら、現地の文化に触れた。



(キャンパスエントランス)



(学内のカフェテリア)



(留学生オフィスの友人らと)

### (3) 私生活

住まいはホームステイを選択し、アメリカに永住しているスロバキアの方に受け入れてもらった。通学は車で送ってもらっていたが、道中の車内での会話がとても楽しかったことが印象的である。その日にあった出来事や知らなかった口語的な英語を話し、意見交換をした。日本の文化や国民性に関して質問されることも多く、アメリカやヨーロッパの文化の比較で盛り上がり、発見や驚きがあった。アメリカは異文化に対して、とてもオープンマインドで受け入れ態勢が浸透していると感じたが、ヨーロッパや日本は比較的慎重で、戸惑いを感じる人が多い人が多いという共通点があった。これは異文化をその地で触れ、比較したことで気づくことができた。



(ホームステイ先周辺の2月の雪景色)



(シカゴの街並み)

## 3. 楽しかったこと・大変だったこと

### (1) 楽しかったこと

友人との大学外での予定である。週末は友人とイリノイ州のショッピングモールに行ったり、シカゴに行き、観光したりととても有意義な時間を過ごすことができた。食事に関しては、初めてのコロンビア

料理が挙げられる。コロンビア出身の友人に連れられ、コロンビアレストランへ行き、伝統料理を食べた。代表的なエンパナーダやバンデハパイサを食べたが、どちらも肉を使用した料理で食べやすく、美味しかったため印象に残っている。シカゴは高層ビルの立ち並ぶ大都会で、歩くだけで楽しく、美術館も多くある。シカゴ美術館は1日かかるほど大きく、ゴッホなど有名画家の作品が多数展示されていた。名物のシカゴピザは通常のピザと比べると、とても分厚く、ディープディッシュというだけあって、ボリュームがあった。

春休み期間には、友人たちとロードトリップで、イリノイ州から約20時間かけてフロリダ州に行き、イリノイとは違った温暖なマイアミで休暇を楽しんだ。



(シカゴピザ)



(コロンビア料理 バンデハパイサ)

## (2)大変だったこと

馴染みのない文化である「スモールトーク」だ。現地ではすれ違いざまに、挨拶をすると同時に近況を聞きあう場面が多かった。そこから広がるトピックは様々で、内容の深い議論になることもある。最初の数週間は、リアクションや即座の返答に必死で、スモールトークという文化だが、とてもエネルギーを使うものという印象だった。しかし、語学スキルが向上し、自身の考えや感じることを発信できるようになり、さらに友人の話に質問できるようになると、会話が楽しくなり、そこから友人の輪が広がった。留学し、世間話を道端ですることは現地に住む醍醐味の一つであると思う。

## 4. 留学を通じて得た学び

語学の向上と同時に、留学という経験を通じ様々な部分で成長できた。

1つ目は思考の柔軟性である。これは現地のアメリカ人のみならず、各国の留学生と交流し、友人になったことが影響している。日本文化に関して質問されたとき、的確に返答できないことがあった。例えば、着物や箸といった代表的な文化に関して、疑問に思ったことのないことを尋ねられ、当たり前を感じていたことを当たり前ではない立場の人に説明する難しさに気が付くことができた。これを受けて、今一度自国文化を見直し、自身とは異なる思考やバックグラウンドを持つ人への配慮や思いやりを学んだ。

2つ目は、行動力だ。私生活の時間管理などに加えて、問題を解決するには自分で何とかしなければならない環境なため、自然と自立できたと感じる。スーパーなどでわからないことがあれば自身で英語で質問したり、検索したりと、行動力が身につく、物怖じすることもなくなった。

今、コロナ禍の渡航制限の緩和が進み、多くの挑戦の機会が再開することと思う。悩んでいる方には、ぜひ飛び込んでみてほしい。私自身、不安もあったが自身で何とかしなければならない環境で成長でき、素敵な友人と出会えた。そして自国を外から客観視することで得られた知見は留学を経験しなければ得られなかっただろうと思う。また、当初の動機であった英語の習得と「グローバルな思考力」は達成できたと考える。